遠藤彰子展⑤

注目の6作品

自然の驚異 人の営み変容

還暦という人生の節目を迎えた遠藤彰子さんは、自身の肉体が生から死へと向かいつつあるのと同時に、季節の循環と同調したかのような感覚を覚えた。これをきっかけに、移ろいゆく季節の在り方と人生を結びつけ、自然と生命が絡み合う東洋的な死生観を表そうとした。こうして完成したのが、四季を題材にした4点の1000号作品である。これらは独立した絵画でありながら、四つで一つの世界観を共有している。

秋の情景を描いた本作では、「今まで在ったものが消え、別のものに変容しながらも、存在し続ける」という意味の古語がタイトルに冠せられている。画面内で最も目を引くのは、黄色い濁流とともに現れる赤い大ダコだろう。大ダコは船に乗って濁流から逃れようとする人々を絡めとり、その行く手を阻む。

大構図には変えようのない大きな物語を示すという遠藤さんの言葉と、作品名の意味を結びつけて考えれば、濁流と大ダコは人々を翻弄し、その営みに甚大な影響をもたらす自然の驚異を寓意化したものと捉えられる。これまで幾度となく発生した自然災害や、新型コロナウイルス禍による生活様式の変化を経験したわれわれにとっては、発表から時を隔てた今もなお、示唆に富む作品といえるのではないだろうか。

ところで、本作の主役といえる大ダコは当初、岸壁に絡みつく大木や根だった。制作を進めるうちにタコへと変化していったという。本作のキーワードである「変容」を体現するかのような、興味深いエピソードである。

（黒沢匠・山形美術館主任学芸員）

「在り過ぐす　秋」2010年、縦333.3㌢、横497㌢

「遠藤彰子展　巨大画で挑む生命の叙事詩」（主催・山形新聞、山形放送、山形美術館）は8月27日まで、山形市の山形美術館。中学生以下は土曜日と、日曜日午前中の入館無料。

遠藤彰子展 ⑥完

注目の6作品

連作 循環する生命の物語

古代中国の自然哲学に端を発する五行思想では、万物を構成する元素として木・火・土・金・水の五つがあり、これらが影響し合うことで変化や循環を生むと考える。四季の連作で自然と生命が絡み合う死生観を表そうとした遠藤彰子さんは、近年五行を題材とした新たな作品に取り組んでおり、本作はその第1作目にあたる。

本作の主役は、画面中央に堂々と描かれた燃え盛る大樹である。五行思想において、木は火を生じるものと考えられていることから、燃える大樹は木から火へと移行していく過程を象徴するといえる。同時に、この大樹が間もなくその命を終えるであろうことも暗示している。

しかし、遠藤さんが本作で表現しようとしたのは、大樹の死という側面ばかりではない。火に焼かれて灰となった木は、やがて土に変化する。つまり、一度燃え尽きた大樹が、また新しい命となり生を全うすることを予感させるのである。

会場では、本作の次の場面をモチーフにした「山鳴りひびく」（2022年）も見ることができる。そこには生命が大地へと回帰し、山に乾いた音が響く様子が描かれている。また、大樹の根元で両手を広げてたたずむ少女と同一人物が登場する「海暮れゆけばただ仄(ほの)かなる」（18年）も展示している。「炎樹」では後ろ姿だった少女を正面のアングルからとらえ、別の時間軸の情景を表した作品である。四季のシリーズがそうだったように、本作を含む五行を題材とした一連の作品も、循環する生命の物語が作品同士の枠を超えて紡ぎ出されている。

（黒沢匠・山形美術館主任学芸員）

「炎樹」 2017年、縦333.3㌢、横497㌢

「遠藤彰子展　巨大画で挑む生命の叙事詩」（主催・山形新聞、山形放送、山形美術館）は8月27日まで、山形市の山形美術館。中学生以下は土曜日と、日曜日午前中の入館無料。